



JEA 青年宣教フォーラム 2014（2014/5/26-27・奥多摩バイブルシャレー）参加者のみなさん（P.6 に関連記事）

目次

《巻頭言》	1
JEA 活動報告	2-3
WEA トロ宣言会議	4
宣教フォーラム 2014	5
青年宣教フォーラム	6
流れのほとり	7-8
日本の福音主義の課題	9
災害の中で仕える	10
信教の自由を守る	11
変革としての宣教	12

ひとたび伝えられた信仰のために

今年6月に開催されたJEA第29回総会にて、新理事長に選出され、恐れをもちつつ就任いたしました。不十分な者ですが、3年間の任期中、どうぞよろしくお願いいたします。

私自身のJEAとのつながりは、1990年頃、救済委員会（現在の援助協力委員会）の委員に任命されて以来ですから、かなり長期間にわたりますので、自分でも新鮮さには欠ける気がしています。より良い形で次の世代に委ねるまでのつなぎの役割を誠実に果たすことができれば、と願っています。

I. 私たちが今得ているもの

「心を一つにして福音の信仰のために」（ピリピ 1:27）はJEA総会資料の表紙にも印刷されているJEAの標語ですが、ユダの手紙3、4節にも似た表現があります。理事長に選出されて、真っ先に浮かんだのはこの聖書箇所です。

「・・・聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは・・・不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人々たちです。」

ユダがこの手紙を書いた宛先の人々は、1節で「父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている、召された方々へ」と呼ばれています。

この人々は、3、4節によれば「私たちがともに受けている救い」「聖徒にひとたび伝えられた信仰」「私たちの神の恵み」を得ています。順番から言えば、三番目のものが最初でしょうか。神の一方的な恵みがあり、伝えられ、受け入れら

れた真理の体系としての信仰があり、そして人生と世界を変革させる救いがあります。

キリストにあって召された者たちは、こうした神からの祝福を、互いに隠すことなく、公に共有しています。私たちは、主にあって互いに、率直に、救いを喜び合う者たちです。



中台孝雄 JEA 理事長
日本長老教会
西船橋キリスト教会牧師

II. 私たちを今脅かすもの

けれども、問題が発生しています。ユダが宛先の信仰者に勧めなければならぬことが生じています。すでに確立された真理の体系として伝えられ、受け入れられるべき「信仰」が、攻撃にさらされているのです。

生じた問題とは「ひそかに忍び込んで来た」人々の存在です。その人々は、「ともに受けている」のではなく教会に「ひそかに」侵入しています。公の率直な共有よりは、隠微さを特徴とします。「神の恵み」をはき違えて「放縱に変え」ています。恵みに基づく誠実な生き方よりは、自分たちの都合による不道徳性を帯びています。「伝えられた」正統な信仰でなく、「主イエス・キリストを否定する」異端的な人々です。

III. 私たちは今戦う

この問題のために「戦う」と、ユダは宛先の信仰者に勧めました。

今日に至るまでキリスト教会が置かれている状

（P.12 に続く）

JEA 活動報告 (AEA, WEA など国際関係を含む)

■北東アジア和解フォーラム

2014年4月21日～26日、韓国北東部のキリスト教施設で、米国デューク大学和解センター主催の「北東アジア和解のためのクリスチャン・フォーラム」が開催され、日本から平野克己師（日本基督教団牧師、説教塾全国委員長）、藤原淳賀師（聖学院大学教授）、品川謙一 JEA 総主事など 12 名が参加した。中国、香港、日本、韓国、米国から 43 名が集まり礼拝と生活を共にしながら、キリストにある和解をテーマに有意義な学びと交流を行った。北東アジアの政治的緊張が高まる中、各国でキリストにある和解を志す者同士が互いに顔の見える信頼関係を築く機会となった。KGK と交流のある韓国学生団体 (KIVF) からの参加者もあり、次世代の韓日キリスト者交流に希望を感じた集会であった。2015 年 4 月は長崎で開催予定。

■アジア福音同盟 (AEA) 実行委員会

2014 年 5 月 5 日、タイ国バンコク市でアジア福音同盟 (AEA) 実行委員会が開催され、植木英次 JEA 国際渉外室長 (AEA 実行委員) が参加した。アジアを 4 つの地域 (南アジア、西アジア、南東アジア、北東アジア) に分けて交流を深めることや、アジアローザンヌ、トランスフォームワールドなどアジア発のグローバルな宣教ムーブメントと協力・連携していくことが議決された。2016 年 7 月にアジア教会会議宣教大会を開催予定。

■世界福音同盟 (WEA) トルコ宣教会議

2014 年 5 月 12 日～17 日、トルコ国イズミール市で世界福音同盟 (WEA) 宣教委員会主催の宣教会議が開催され、松崎ひかり JEA 宣教委員、品川謙一 JEA 総主事が参加した。

【詳細は P.4 の記事参照】

■「フクシマを共に生きる」祈りのフォーラム

2014 年 5 月 24 日、お茶の水クリスチャンセンターにて「フクシマを共に生きる」出版記念祈りのフォーラムが開催された。「フクシマを共に生きる」(いのちのことば社刊)は 2013 年 11 月の JEA 宣教フォーラム・福島県の講演内容を書籍化したもの。福島県キリスト教連絡会 (FCC) 委員長の木田恵嗣師、会津放射能情報センター代表の片岡輝美氏などが講演し、福島の実状を覚えて祈りを合わせた。

■青年宣教セミナー

2014 年 5 月 26 日～27 日、奥多摩バイブルシャレーで青年宣教セミナー (JEA 青年委員会主催) が開催された。【詳細は P.6 の記事参照】

■アジア福音同盟 (AEA) 女性指導者会議

2014 年 5 月 27 日～30 日、インドネシア国バンドン市でアジア福音同盟 (AEA) 女性指導者会議が開催され、日本から梅田登志枝 JEA 女性委員長、藤田真木子 JEA 女性委員が参加した。【詳細は P.7 の記事参照】

■第 29 回日本福音同盟 (JEA) 総会報告

2014 年 6 月 2 日 (月)～4 日 (水)、静岡県掛川市で、第 29 回 JEA 総会が開催された。JEA 加盟の 54 会員 (教団・教会) と 42 協力会員 (宣教団体) から 129 名 (代議員・オブザーバー) が出席し、2014 年度 JEA 事業計画として、①東日本大震災からの復興支援継続とその経験を活かした宣教協力の推進、②第 6 回日本伝道会議 (JCE6 2016 年・神戸) に向けた取り組み、③アジアおよび世界の教会との連帯と具体的な協力の業、④各専門委員会による活動計画、などについて協議・決定した。(詳細は JEA ウェブサイト <http://jeanet.org/> の「第 29 回 JEA 総会報告」の「2014 年度 JEA 事業計画」を参照。) また理事・理事長選挙が行われ、中台孝雄師 (日本長老教会) が新理事長に選出され、2014 年度～2016 年度までの 3 年間で任期とする新理事会が発足した。

新理事会のメンバーと役割分担は以下の通り。中台孝雄理事長 (日本長老教会)、小平牧生副理事長 (基督兄弟団)、大井満副理事長・援助協力委員会担当理事 (日本キリスト合同教会)、田中進書記担当理事 (イマヌエル綜合伝道団)、八尋勝書記担当理事 (日本福音キリスト教会連合)、細井真会計担当理事 (日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団)、川原崎晃会計担当理事 (日本イエス・キリスト教団)、中西雅裕宣教委員会担当理事 (日本ホーリネス教団)、佐々木望神学委員会・JCE6 担当理事 (日本バプテスト教会連合)、中谷美津雄社会委員会担当理事 (日本同盟基督教団)、金本悟女性委員会担当理事 (日本神の教会連盟)、畑野順一青年委員会担当理事 (日本フリースタイル教団)。

1. 日本における福音主義の課題

一日目の夜は「日本における福音主義の課題～歴史・聖書・神学の視点から」と題して、JEA 神学委員による講演が行われた。

山口陽一師は歴史の視点から、戦後日本の福音主義が自由主義と国家主義の克服を目指したこと、JEA 設立の経緯と超教派的連携によって生み出された協力の実、今日の課題としての聖書信仰の確認と国家主義との戦いなどについて語った。

鞭木由行師は福音主義における聖書の中心性について、初代教父、宗教改革者、ピューリタンと敬虔主義者、1950 年代北米の新福音主義運動などの立場を概観し、福音主義の最も顕著な特徴は聖書の十全靈感を信じ、聖書だけを中心として神学を構築することだと語った。

関野祐二師はキリスト者の自然理解と被造物統治/管理という観点から、東日本大震災 (自然災害、原発事故) によって問われた包括的福音理解・宣教に関わる問題の根底には、日本の福音主義が長年積み残してきた自然・被造物と聖書信仰の関係に関する課題があり、次世代の日本の福音主義を育むために、今取り組まなければならないと語った。



北東アジア和解フォーラム参加者
北朝鮮国境非武装地帯にて



WEA トルコ宣教会議でエフェソ遺跡を訪ね
黙示録の御言葉から主の語りかけを聴いた



「フクシマを共に生きる」出版記念
フォーラムで福島の実状を語る片岡輝美氏



アジア女性指導者会議で発題する
梅田登志枝 JEA 女性委員長 (左)



新旧理事会メンバーと神学委員会発題者



「教会ネットワークの可能性」発題者と
新旧理事長・宣教委員



JCE6 に向けてのビジョンと協力を語る
竿代照夫 JCE6 実行委員長



トランスフォーラムワールド世界宣教会議
東アジアグループ参加者



ミラノ賛美教会の礼拝に集っている方々



「危機対応・最初の 48 時間」出版記念
セミナーで語るチャプレン委員各氏



広島土砂災害支援室の先生方と



フィリピン福音同盟新ディレクターのバントーハ師（右）
と保守バプテスト同盟議長のレイ師（左）

2. 「再生への Re-VISION ～福音・世界・可能性」第 6 回日本伝道会議に向けての協力

二日目午後には、第 6 回日本伝道会議（JCE6）のテーマ「再生への Re-VISION ～福音・世界・可能性」と開催地神戸における取り組みに関する発題があり、それを受けて日本宣教の諸課題について活発なグループディスカッションが行われた。

開催地・神戸では、六つの JEA 専門委員会に対応する地域委員会が立ち上げられつつあり、地域における教派・教団をこえた宣教協力が始まっている。JEA がもつ人のつながりや情報が地域の宣教を前進させる力になるにはどうしたらよいのか、JEA そのもののあり方を「Re-VISION」するチャレンジも語られた。

3. 地域教会ネットワークの可能性

二日目夜のシンポジウムは、「地域教会ネットワークの可能性」のテーマのもと、各地の教会ネットワークの実践から学ぶ時をもった。

佐々木真輝師（3.11 いわて教会ネットワーク）：東日本大震災により「なぜそこに教会があるのか、なぜ協力するのか」が問われた。被災者の視点で考え、人々が必要としていることに教会の公同性を意識しながら取り組んできた。ネットワークで大切なのは信頼関係。今、東北で直面している現実とは 50 年後の日本全体の教会の姿だろう。

松本順師（JEA 援助協力委員長、DRCnet 教会防災ネットワーク推進プロジェクト）：教派による縦割りの強い首都圏では、防災の観点は教派をこえた協力のきっかけになる。ネットワークを組めば、地域社会や行政ともつながりやすくなり、地域における教会の存在感が増すことになるだろう。災害が起こる前に準備しておくことが大切である。

羽鳥頼和師（東海福音フェローシップ）：名古屋地区の宣教協力はリバイバルクルセードから始まった。自発的な活動を主にしており、最低限の組織しかつくっていない。東海地震に備える地震委員会や東海聖書神学塾など地域ネットワークのメリットを活かした活動を心がけていることが長続きの秘訣だと思う。

■トランスフォーラムワールド世界宣教会議

2014 年 6 月 9 日～14 日、フランス国マコン市近郊でトランスフォーラムワールド世界宣教会議が開催された。そこに集まった AEA 関係者と、韓国異端問題によって WEA 総会が事実上中止となり、WEA 総主事が 2014 年末に交代することについて話し合い、AEA としてフィリピン福音同盟前総主事のテンデロ師を次期 WEA 総主事に推薦し、WEA 正常化のために連携することを確認した。WEA 執行部に対して JEA は正常化のための改革を提言している。

【会議の詳細は P.12 の記事参照】

■欧州日本語教会訪問

2014 年 6 月 15 日～23 日、ミラノ賛美教会（内村伸之牧師）、パリ・プロテスタント日本語教

会（高橋稔牧師）、ロンドン JCF などを訪問し、欧州の日本語教会・集会の現状を見させていただいた。JCE6 に向けて日本人ディアスポラのネットワークを強めていきたい。

■心のオアシス・リトリート開催

「恵みに生かされ、恵みに生きる」をテーマに、2014 年 6 月 23 日～25 日、日光オリーブの里にて「心のオアシス・リトリート」（JEA 女性委員会主催）が開催された。主講師は堀肇師【詳細は P.8 の記事参照】

■「危機対応・最初の 48 時間」出版記念セミナー

DRCnet 災害対応チャプレン委員会で行ってきた「危機対応・最初の 48 時間」（いのちのことば社刊）が出版され、2014 年 6 月 28 日、お茶の水クリスチャンセンターで出版記念セミナーが開催された。

【関連記事は P.10 を参照】



■石川弘司先生記念礼拝

2014 年 7 月 3 日、お茶の水クリスチャンセンターで、石川弘司師の記念礼拝が執り行われた。石川弘司先生は 1986 年の JEA 再編後、初代の JEA 事務局長（現在の総主事）として 1993 年まで奉仕された。

■3.11 いわて教会ネットワークリトリート

2014 年 7 月 15 日～16 日、岩手県錦秋湖において、3.11 いわて教会ネットワークのリトリートが開催された。【詳細は P.10 の記事参照】

■広島土砂災害への支援

2014 年 8 月 20 日に起きた広島土砂災害に対して、松本順 JEA 援助協力委員長が同月 28 日～29 日に現地を訪問し、広島土砂災害支援室に御見舞金を届けた。

■フィリピン福音同盟新ディレクター来日

2014 年 9 月 17 日、保守バプテスト同盟 50 周年記念行事で来日したフィリピン福音同盟（PCEC）新ディレクターのノエル・パントーハ師らに面会し、アジアにおけるパートナーとして協力関係を強めていくことを確認した。

■宣教フォーラム 2014

2014 年 9 月 29 日、お茶の水クリスチャンセンターで宣教フォーラム 2014 「危機の時代と共に生きる～教会ネットワークから学ぶこと」が開催された。【詳細は P.5 の記事参照】

■第 3 回 NSD セミナー

2014 年 9 月 29 日、お茶の水クリスチャンセンターで第 3 回 NSD セミナーが開催され、「クリスチャンキャンプってすごい！」をテーマに hi-b.a. スタッフの中村克哉師による講演が行われた。

世界宣教の鍵は地域教会

WEA トルコ宣教会議報告

Global Consultation TURKEY 2014

Gospel - Church - Witness

JEA 総主事 品川謙一

2014年5月12日～17日、トルコ国イズミール市（黙示録に出てくる旧スミルナの町）近郊で世界福音同盟（WEA）宣教委員会主催の第13回世界宣教会議（13th WEA Mission Commission Global Consultation in Turkey）が約三年ぶりに開催され、50カ国から210名の宣教リーダーが集いました。日本からは松崎ひかり JEA 宣教委員（WEA/MCメンバー）と品川謙一が参加しました。

今回のテーマは「福音－教会－証し」（Gospel-Church-Witness）でした。WEA 宣教委員会は OM や SIM などの国際的宣教団体関係者のネットワークを母体としており、参加者も宣教師、宣教団体のスタッフが多いのですが、そのコンテキストの中で「教会」を中心にしたテーマを掲げたことに大きな意味があったと思います。宣教団体は様々な宣教方策と人材・資金をもち、グローバルなネットワークで世界宣教を展開してきましたが、近年はそのような宣教パラダイムに変化が起きています。文化的なコンテク



パウロたちの騒動の舞台となったエベソの劇場跡

ストに合わせた持続可能なミニストリーを展開していくためには、各国の地域教会と連携・協力していくことが不可欠であり、むしろ教会こそが世界宣教の担い手であるとの再発見が起きていると感じました。それは前回シュツットガルト宣教会議で南アフリカからリーダーが立てられ、宣教の方向が北（先進国・欧米）から南（アジア・アフリカ・中南米）という構図から、南から北に逆転したと宣言されたのに続くパラダイムシフトでしょう。

開催地にトルコが選ばれたのも、使徒の働き、初代教会開拓の地に帰ること、もう一度神様の世界宣教のビジョンにおける地域教会の中心性を再確認し、黙示録の七つの教会（エベソ、スミルナ、バルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤ）に語りかけられた主イエスのメッセージを聞くことで、この終わりの時代に教会があるべき姿を学ぶためでした。

毎朝の聖書講解では使徒の働き、ヨハネ黙示録から初代教会の歩みと戦いが語られ、その後、世界各地の教会で起こっている宣教事例とそこから学ぶこと、迫害下にある教会の現実と祈りの時などのセッションが続きました。かなり密度の濃いプログラムで体力的には大変でしたが、各セッションでは必ずテーブルディスカッションの時間があり、同じテーブルの6～8人の人々と、語り合い共に祈る機会があったことは大きな恵みだったと思います。私のテーブルにはエジプト福音連合のリーダー、デンマーク・ルーテル教会の牧師、シンガポールの宣教学者など多様な方々がいて、それぞれの教会、宣教の現実から学ぶこと、励まし合うことが多くありました。

会議の中、このトルコの地で採択されたニカイア・コンスタンティノポリス信条の教会の四標識〔唯一性（One）、聖性（Holy）、公同性（Catholic）、使徒性（Apostolic）〕が繰り返し引用され、福音派が自らの競争的、分断的指向を悔い改めて一致すべきこと（One）、

福音を宣べ伝えるだけではなく福音に生かされキリストの似姿を目指すこと（Holy）、キリストの主権は被造物全体におよぶものであり、社会や地域に参与し包括的福音宣教に取り組むこと（Catholic）、シンプルな使徒の教えの原点に帰ること（Apostolic）、が強調されていました。

一世紀の教会は小さく、迫害にさらされていました、イエスの愛に生かされ、地の果てにまでその愛を届ける生き活きとした生命力をもっていました。

使徒8章にあるように迫害は福音前進のための鍵であり、キリストの教会は常に旅の途上にあり（pilgrim church）、動き続ける教会（church on the move）であるはずで



ラオデキヤ教会遺跡で、黙示録のラオデキヤ教会への手紙を朗読し共に祈った

つの間にか内向き・安定志向となり、制度化、組織化され生命力を失ってしまうことを黙示録の七つの教会の姿は物語っています。「どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい」（黙示録2:5）との主の言葉に答えなければなりません。

東日本大震災後の東北の諸教会、特に各地の地域教会ネットワークの働きは、まさに「一つの、聖なる、公同の、使徒的教会の業」の実践であったと思います。そして内向きではなく、人々が傷つき、争い、途方にくれている、そのただ中にキリストの愛に生かされて入っていく（church on the move）、彼らと共に困難と戦いの中を歩み続ける教会（pilgrim church）の回復がなされました。これは日本だけでなく、世界中の地域教会、宣教団体の働きの中で学ばれていることなのです。

現在のトルコは世俗主義的イスラム教国家で、キリスト教人口は日本より少ない0.13%（ほとんどはアルメニア人など民族的キリスト教徒）。プロテスタントの信者は5,000人程度ということで、そこが新約聖書における異邦人キリスト教会開拓の地であり、ギリシャ



フィラデルフィアの教会遺跡で各国の参加者と共にこの遺跡は隣りのモスクが管理している

正教の中心地だったという歴史が信じられないほどキリスト教の存在感がない場所です。牧師が過激派に拉致されて殺される事件も起こっていることから、会期中は集会の写真は撮らせず、

SNS への投稿も禁止という厳戒態勢の中での会議でした。同時にトルコは非常に親日的な国でもあり、日本人キリスト者として何かできるのではないかと思います。トルコにある教会のためにも祈りを篤くしなければならぬと思われました。

危機の時代を共に生きる

教会ネットワークから学ぶこと

JEA 宣教フォーラム 2014 報告

JEA 宣教委員 神谷典孝
日本福音キリスト教会連合
横浜さが丘キリスト教会

2014 年 9 月 29 日、JEA 宣教フォーラム「危機の時代を共に生きる～教会ネットワークから学ぶこと」が、お茶の水クリスチャンセンターで行われた。以下主題講演を中心にプログラムに沿って報告する。

主題講演は小平牧生師（基督兄弟団ニューコミュニティ牧師）による「福音宣教と教会ネットワークを考える」。始めに、エペソ 4 章 16 節から、キリストの体としてのネットワークの特質について語られた。その第一は個の主体性、互いの違いを認め、評価し、協力し、緊張や対立も積極的に評価しながら主体的につながる。第二は相互のつながり、互いに影響を与えることによってそれぞれが成長し、つながることで生まれる新しい展開を目指す。第三はつなぐ結び目、各部分が共有する存在、関係、経験、目的などをつなぐ、一般のネットワークでいうリンク。教会は、共有する信仰、歴史、使命や働きといった中に「備えられたあらゆる結び目」を見い出す時、ネットワークが強固にされる。第四はからだとしての成長、互いに影響し合いながら全体として成長し続けていくこと。そして第五は全体を貫く価値観、個の主体性が強調されながらも目標や価値を共有する人々の間で、違いや制約を超えて作り上げられていくのが教会ネットワークであること。

続いて、このネットワークの特質を用いて、具体的にダイナミ



主題講演を語る小平牧生師

ックな宣教協力を進めることの提言がなされた。その第一はこのネットワークの特質を絶えず見直し、共有する作業を繰り返していくべきこと。第二は、全体を貫く目的や価値観を繰り返し確認すること。第三は一つの船に乗っている

チームである意識を高める努力から信頼関係を築き、それを崩すことがない誠実な歩みをする。そして最後は、これまでの議論を踏まえて具体的なネットワーク作りにとりこんでいくことである。

続いて四人のパネラーの先生によるパネルディスカッションが行われた。大友幸一師（宮城宣教ネットワーク）は、震災後、支援活動により人々の信頼を得ることができても、このままでは伝道ができずに終わってしまうと感じた危機感から、宮城宣教ネットワークを立ち上げられた。栗原一芳師（DRCnet 教会防災ネットワーク推進プロジェクト）は、震災の経験から、首都圏直下型地震に備え、歩いていける距離での助け合いの必要を覚え、首都圏防災ネットワークを立ち上げられた。高橋和義師（五所川原福音キリスト教会・いっぽいっぽ岩手）は、震災後、OMF の特別職員として支援活動に従事し、現在、その働きを受け継いだ所属団体と一般社団法人による、開拓伝道と支援活動の責任者として奉仕されている経験から、教会と宣教団の協力について語られた。西村敬憲師（JEA 青年委員長）は、これからの青年たちはネットワークによって目的を共有する多くの場をもっていくが、その場は教会となるとは限らないので、彼らを信頼して見守り、コミュニケーションを続けていくことと、教理教育によって間違った方向にそれないように青年たちの判断力を養っていく必要性を語られた。

午後は「フクシマ NOW」と題し、住吉英治師（勿来キリスト福音教会）と金成孝悟師（勝田笹野キリスト教会）が動画によって福

島の現状を報告された。線量計の高い数値、無造作に積み上げられた放射能汚染土の真っ黒な袋、そして人影のない家々に胸が詰まる思いだった。

続いて四つの分科会が開かれ、「第6回日本伝道会議」（JCE6 事務局長 畑中洋人師）では現在検討しているプログラムの概略とプロジェクトの準備状況についての説明の後、出席者による熱心な意見交換がなされた。「災害対応チャプレン」（DRCnet 災害対応チャプレン委員 岩上敬人師）では、災害の各段階における必要に応じた被災者の心のケア・スピリ



パネルディスカッションで語る各師

チュアルケア

の必要性が語られ、併せて燃え尽きず長期的支援を行うため、支援者のための心のケア・スピリチュアルケアの必要性も語られた。「女性のネットワーク」（救世軍 藤井千明師、岡本貴仁師）では「女性の立場でできるネットワーク」と「支援と学びの実際」と題された二つの講演がなされ、救世軍のネットワークと支援の実際の活動が紹介された。「国際人宣教協力」（ディアスポラ宣教ネットワーク 青木勝兄、松崎ひかり姉、永井敏夫師）では、職域・生活域の現場 Workplace における社会変革を支える宣教支援と、激変する世界の動きの中で求められる宣教協力について語られた。「地域教会ネットワーク」（イザヤ 58 ネット 鈴木真師）では、超教派でなく協教派、地域の教会の共通理解の確認、教会の規模による意識のギャップの理解、宣教団体と地域教会のギャップという視点、地域教会ネットを始める場合は社会的に広がりのあるテーマを選ぶべきこと、地域教会間の適切なコーディネーターが必要である

こと、などが語られた。



国際人宣教協力分科会

最後の閉会礼拝では末松隆太郎 JEA 宣教委員長が、この世に人間の罪があふれ、被造物全体の呻きを感じられるような現代であればこそ、イエス様の大祭司の祈りのように、天の父が主イエスを世に遣わされたことをこの世が信じるため、クリスチャンたちが一つとなることの必要を語られた。

全体として、大震災後の教会の活動を振り返りながら、今、そして将来の宣教協力のため多くの示唆が与えられた集会であり、主イエスによってこの世に遣わされたことの期待の大きさと責任の重さを再確認させられる時だった。

★ JEA 宣教委員会では以下のシンポジウムを企画しています。

詳細は改めてご案内します。

宣教シンポジウム ムスリムの隣人を知る（仮題）

日程：2015 年 2 月 7 日（土）

場所：お茶の水クリスチャンセンター

『キャンプ!!』～教会を建て上げるために～

JEA 青年宣教セミナー報告

JEA 青年委員 早坂恭
日本福音自由教会協議会
東村山福音自由教会

少子高齢化の波が教会にも押し寄せている昨今。「青年たちをキリストへ!」との思いから JEA の青年委員会は青年宣教セミナーを毎年開催しています。8 回目を数える当該セミナー。今年は 2014 年 5 月 26 日～27 日の日程で、奥多摩パイブルシャレーにて一泊二日のプログラムでもたれました。緑豊かな神様の創造のみわざを味わいつつ、青年宣教について共に学び、真剣に語らう良き研鑽の時をさせていただき心から感謝しています。今回のテーマはズバリ「キャンプ!!」。しかし、キャンプの目的は単に「参加して良かった!楽しかった!」という青年を増やすことではありません。彼らが



主イエス様にしっかりと繋がり、キリストのからだなる教会を建て上げていく働きでなければなりません。そのような面で副題には「教会を建て上げるために」というテーマが掲げられています。参加者は男性 21 名、女性 5 名、教職者、信徒合わせて 26 名でした。

今回の講師は、インマヌエル綜合伝道団の田辺岩雄師（インマヌエル千葉教会）、薦田聡毅師（インマヌエル堺教会）の二名。最初にこのキャンプが始まった経緯をお話ししました。教会の高齢化という危機感、そしてせっかく与えられている中高生が信仰の友を得る機会や信仰を強められる機会をもてずにいる現状。そのような危機感から、教会における若い人材の育成に重荷のある者たちで、中高生たちの救いと成長を願って「とにかくキャンプを!」とスタートしたのがきっかけのことでした。すべてが揃ってからスタートするのではなく、祈りのうちに重荷をもつ者が一歩を踏み出す時に主が必要を満たし、備えて下さるということを教えられました。そこでつけられ

た名前が「TONICAM（とにキャン）」。2007 年から始まった「とにキャン」は、最初は中高生の参加が 59 名とのことでしたが、毎年続けて来られる中、2013 年には 77 名となっており少しずつ増えている印象です。特にリピート率の高さが特徴的で、中高生の時期に「信仰の友」が与えられることの大切さを痛感させられます。同じ教会には中高生が自分しかいない。そのような孤独に悩んでいる中高生は少なくありません。彼らにとって同世代の信仰の友がいることがどれほど励みになるのでしょうか。とにキャンはまさに中高生同士を結び合わせる最高の機会となりました。同時に「とにキャンは、教会に仕え、中高生が霊的体験（救い・聖潔・献身）に与るよう祈り導き、交わりを深める場を提供し、日常生活で輝くクリスチャンを教会と世に送り出す。」との明確なミッションステートメントをもって行われているキャンプです。教会に仕えるキャンプ、育てられた中高生を教会と世に送り出すキャンプとの文言に、今回のテーマとの一致を見る思いでした。ご奉仕下さった先生方に心から感謝致します。ディスカッションの時間は、教派を超えてそれぞれのキャンプでの課題、苦闘していること、工夫やアイデアなどを分かち合いました。講演の中でもあった経済的課題、人材的課題については、やはり教団や各個教会の理解と支援が欠かせないものであることを再認識させられました。今後も継続して、このようなセミナーが行われ良きネットワークが構築されること、また互いに良いものを学び合つて青年のための宣教が大いに前進することを主に期待しています。



キッズ・ユースと世界を変えていこう～4/14の窓運動リーダーシップサミット報告～

世界各地で拡がりをみせている 4/14 の窓運動 (4/14 window movement) リーダーシップサミットが 2014 年 7 月 12 日、お茶の水クリスチャンセンターで開催され、約 140 人が参加。この運動の創始者で宣教学者のルイス・ブッシュ師が日本の参加者たちに 4/14 の窓運動のビジョンを語りました。

4/14 の窓運動は、世代による福音の受容度に注目し、価値観が確立する 4 歳から 14 歳の時期に焦点をあてた宣教運動。2013 年 10 月バンコクでの 4/14 グローバルサミットには世界 92 カ国から 800 人以上のリーダーたちが参加している大きなムーブメントです。



日本では 2009 年の第 5 回日本伝道会議 (JCE5) 子どもプロジェクトコーディネーターの杉本玲子師たちが中心となってサーバントチームが立ち上げられ、11 月 24 日～25 日には初めての

全国カンファレンスが開かれる予定です。JEA では JCE5 子どもプロジェクトからの流れと、ユースから青年へのつながりで JEA 青年委員会の枠組みで協力をしています。

現代の 4/14 世代の特徴として、①世界に対する不満、②つながる欲求（ソーシャルメディア）、③家族・教会など価値観を与えるものの不在、があり、これは開発途上国から先進国まで世界中で共通しているということです。加速度的に不安定化している世界情勢の中、地域紛争、貧困、人身売買、家族崩壊などで最も傷つき虐げられているのもこのキッズ・ユース世代であり、また世界を福音によって変革する可能性を秘めているのもこの世代だと語られました。この世代にキリストの愛を届け、共に神の義と愛の現れる世界と教会を建て上げていくことは世界中の教会に共通の使命だと感じました。

少子高齢化で世界最先端をいっている日本ですが、ひとり一人の子どもたちが負っている課題は世界と共通です。世界の諸教会と連帯しながら、私たちの近くにいるキッズ・ユース世代に関わり、彼らと一緒に日本を、そして世界を福音によって変えていくムーブメントに参加していきましょう。(JEA 総主事 品川謙一)

流れのほとりて

JEA 女性委員長 梅田登志枝
イムヌエル綜合伝道団 市川キリスト教会

この夏もそれぞれの特別な集会やキャンプなどで、豊かな恵みをいただかれたことでしょう。

私は5月にインドネシアで開かれたアジア福音同盟の女性指導者会議に出席する機会を与えられました。アジアの教会とクリスチャン女性たちの現状を分かち合い、祈り合いました。どの国もそれぞれの特有な困難のなかで、救霊と宣教に燃えるクリスチャン女性を用いて、神様はみわざを進めておられることを確認し、聖名を崇めました。

6月には女性委員会主催の第11回「心のオアシスリトリート」がもたれました。主講師の堀肇先生の「こころの部屋を空けて」の講演を伺いながら、まさに御霊によって心が解放されていく恵みを与えられました。私たちは今、このような「イベント」を超えて収穫の季節へ、一年の締めくくりへと向かうようにしています。

マタイの福音書14章15章にはキリストのパンの奇跡が続けて記録されています。多くの人々の空腹が、僅かなパンと魚で満たされた奇跡は大イベントでした。これは弟子たちにキリストが神の子であることを認めさせるきっかけとなり、群衆にはイスラエルの王となることを期待させる特別な「イベント」であったに違いありません。けれども「イベント」は終わりました。キリストのお話と給食に心もお腹も満たされた人々もそこを立ち去りました。この世の「イベント」の後、その場に残るのはゴミが多いのかもしれませんが。けれどもキリストの居られた場所に残されたものは、たくさんのかご

に溢れんばかりに集められたパンでした。それはただのゴミではなく、キリストの人々に対する愛そのもの、神の子としてのお力の証拠でした。「私は命のパンです」(ヨハネの福音書6章48節)とおっしゃったキリストは、かき集められたパンくずによっても私たちの魂を活かし満たすことのおできになる方ではないでしょうか。

イベント的な恵みは私たちの信仰生涯に大きな力をもたらすでしょう。けれども日常に散りばめられている恵みを取り集めるようにして、キリストの命に生かされながら、日々の責任や課題の中を主と共に歩んでいく大切さを、あらためて教えられます。その恵みは私たちから溢れ出て、どなたかを活かす糧として主ご自身がきつと用いてくださることを信じましょう。

※編集注：発行が遅れたために季節感がずれてしまったことをお詫びいたします。



アジア福音同盟女性指導者会議レポート

JEA 女性委員 藤田真木子
日本同盟基督教団 北総大地キリスト教会

「アジアの宣教の課題と女性の聖書的役割を共有し祈る」

アジア福音同盟女性指導者会議 (Asia Evangelical Women Leaders Consultation) がインドネシアで開かれました。会議としては、2013年フィリピンに次いで第二回目となります。JEA 女性委員会から梅田登志枝委員長と私が出席しました。5月27日～31日の雨季から乾季に移る季節、首都ジャカルタから高速で三時間の学園都市バンドンにあるニュー・テストメント教会の温かい歓迎を受けて行われました。アジア11か国の福音同盟から25人、世界福音同盟 (WEA) から3人の合計28人が会議の参加者。最終日の晩餐会は教会の夫人たちを中心に500名の集いとなりました。

会議では多くの時間を各国のレポートに割り、各国の教会が置かれている状況と宣教の課題が伝えられました。経済至上主義による深刻な課題、政情困難、福音宣教への圧力、道徳観の低下、人権問題、差別が報告され、私は日本の政治的右傾化について Japan Update を配布して説明しました。熱心に語り、聞き、祈り、唯一の主からの宣教命令によって召されていることを確認しました。また、モンゴルや民主化が進むミャンマーからの若い参加者たち、その積極的な姿勢に目を見張り、世代交代を思いました。

基調講演として、アジア女性会議委員長キム・ユンヒョー氏 (韓国) からアジアの新しいファッションや文化の傾向について分析がありました。WEA からの3人、バルバドス、エジプト、オーストラリアの代表者が講演。中でもバルバド

ス代表者による人身売買の報告と課題は日本を含め各国にも共通する厳しい事態を提示されました。

アジア女性会議を今後どのように開催するかも重要な課題でした。開催地についてはモンゴル、ミャンマーも手を挙げましたが、今回は2016年5月にタイのチェンマイ、二年に一度の開催が決まりました。祈祷課題の交換のための地域別グループも決めました。

今、この会議を通し心にあることは、民族、文化、経済状況などにおいて多様性に富むアジアの教会が互いに尊敬をもって交流を継続すること、今回欠席の約半数の国と地域を覚えることです。続けて JEA 女性委員会と AEA 女性委員会との交流を深め、私達の役割が何であるかを考えていきたいと願っています。全行程の主の守りと祝福を感謝します。



* * * サンデーランチ * * *

★レモンケーキ

しっとりした甘酸っぱいケーキです。
6月の心のオアシスリトリートのコーヒーブレイクにお出ししたレモンケーキです。皆様から、レシピを教えて欲しいとのリクエストが多かったので、作り方を載せます。

【材料】

- *パウンドケーキ型21×10cm
- ・ケーキ用マーガリン又は無塩バター 150g
- ・砂糖 150g
- ・卵 3個
- ・レモン(皮) 1個
- ・レモン汁 30～40cc
- ・小麦粉(薄力粉) 150g
- ・ベーキングパウダー 小さじ1
- ・塩 少々

【作り方】

- ① マーガリンを常温にして、砂糖と泡立てる。
- ② 卵を一個づつ加える。細かく下ろしたレモンの皮を加える。
- ③ 小麦粉、ベーキングパウダー、塩を混ぜ、生地の上に振り、混ぜ合わせる。

JEA 女性委員 プリスキラ・クンツ
日本福音キリスト教会連合 松見ヶ丘キリスト教会

- ④ ベーキングシートをパウンドケーキ型に合わせて入れ、上から生地を入れて平にする。
- ⑤ オーブンで焼く。180度、45～55分間



《ポイント》

- ① 焼き上がったケーキはすぐ型から出さないで、5～10分冷ましてから、串で何力所か刺しておく。
- ② 刷毛でレモン汁(レモン一個分30～40cc)をケーキの上に塗る。
- ③ レモン汁が完全にケーキの中にしみ込むために、ケーキを一日置いておく。

* 甘酸っぱいレモンケーキをぜひ作って、美味しく召し上がって下さい。

「恵みに生かされ、恵みに生きる」

6月23日(月)～6月25日(水)、「第11回心のオアシスリトリート」が、JEA 女性委員会主催のもと、緑豊かな「日光オーリーブの里」を会場にもたれました。冒頭のテーマで、講師に堀 肇先生(日本伝道福音教団 鶴瀬恵みキリスト教会牧師)をお迎えしての、「心」に焦点を当てた新鮮で温かなメッセージ、分科会は「引きこもりの立ち直り」「子どもと共に生きる」「高齢者への対応」「より良い夫婦関係」と各々担当の先生方が奉仕して下さり、どれも興味深い内容でした。六十名ほどの教職の方、信徒の方(半々位でしょうか)が参加され、美しく静かな自然の中、整えられた施設で快適に過ごさせて頂き、心のこもった家庭料理や談話室でのティータイム、前回のリトリートでお会いした方、初めてお会いした方々との語らいも楽しく、心豊かな三日間を過ごさせて頂きました。いろいろな方の愛の奉仕と犠牲があって、私がこの恵みにあず



れたことを今思い、今度は私が、誰かの受ける恵みのために用いて頂きたいと願っています。

講演Ⅰでは、どんな醜い自分でも知られていてなお愛される関係は、イエス様との関係のみ、私たちの奉仕 伝道の

佐藤一枝
基督兄弟団 日立および岩間教会

原点は、この主に無条件に愛されている自分を確信することと再確認しました。

講演Ⅱでは、人は本当に赦されると 教育的アプローチを受け入れることができる(教えて人を変えようとするのはムダ)。理解され愛されると、悪かったと思い、その人を悲しませてはいけなしいと思ひ、行動の修正が起こる。「愛が先」、目からウロコでした。



講演Ⅲでは、心の居場所となるような 安全で温かい家庭を作ることが大切であること。健全な家庭は、問題が無い家庭ではない。問題によって、健康な家庭になっていく。子どもに問題が出たら、親の陰を引き受けていると考えてよい。その子の周り全体が変わらなければならない。と新しい視点を与えられました。

まさに「心のオアシス」となるリトリートでしたが、次回は三年後に開催されるとのこと、教会の方達にも声をかけて一緒に参加できたらと思っています。

このリトリートのために準備し、ご奉仕下さったすべての方々に感謝いたします。

牧師の本棚

日本における福音主義の課題

JEA 神学委員長 関野祐二
聖契神学校

今年6月のJEA総会にて、前任の山口陽一委員長よりお役を引き継いだ。神学委員会に加えられたのは2004年のことで、イラク戦争勃発後に日本でも課題となった、キリスト教原理主義と福音主義の問題を研究し、ブックレット「原理主義」を2006年に共著で刊行した。2009年の第五回日本伝道会議に向けた「札幌宣言」起草と翌年の解説書刊行に携わった後、日米で話題のフランシス・コリンズ著『ゲノムと聖書』を題材にキリスト教と科学の問題を研究し始めて一年後、東日本大震災と福島第一原発事故が発生。それまでの学びを生かし、聖書、科学／技術、環境、罪と欲望など多方面から原発問題を扱う「原発と私たちの責任 ―福音主義の立場から」を、神学委員会ブックレットとして2013年に上梓した。振り返ってみると、一貫して問われ続けたのは、前述の副題にある「福音主義」の中身だったように思う。福音主義教会や諸団体が加盟する宣教協力機関としてのJEA、その専門委員会として神学委員会が設置されている意義からすれば、実に自然な役割であったし、ますます重要度が増しているであろう。今年のJEA総会初日夜、神学委員会担当で「日本における福音主義神学の課題 ―歴史・聖書・神学の視点から」セミナーを行い、委員三名が発題したのはこうした経緯からであった。

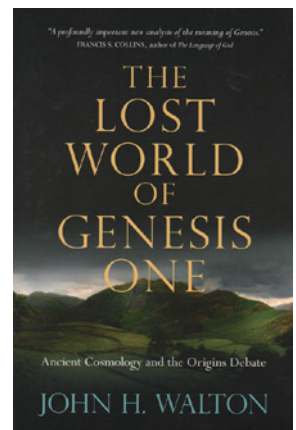
2010年の「ケープタウン決意表明」、翌年の3・11で福音主義教会が問われたのは、包括的福音（Holistic Gospel）と包括的宣教（Holistic Mission）であった。1974年のローザンヌ誓約以来、福音派はそれまでの悲観的終末論に基づく伝道至上主義から脱却し、社会的責任をも含めた包括的宣教を進めてきたはずだが、神と被造物世界との関係性、そこにおける人間の位置づけと役割に関し、聖書に基づいた神学的構築と深まりはあまり進展せず、聖俗二元論およびこの世との対決姿勢、個人的かつ霊的救いに特化された救済論、地上における文化的営みの聖書的位置づけのあいまいさは続いて来た。

筆者はその鍵が「キリスト教的自然理解」、すなわち我々が生き、生かされている宇宙をも含めた自然界を神がどのようなものとして創造し治めているのか、その自然を支配するよう委託された「神のかたち」としての人間のあり方、そして贖いの対象でもある自然を、同じく贖いの対象である我々人間がどのように理解し管理したらいいのか、そこにあると考えている。主なる神は、被造物全体が贖われる新天新地への回復プロセスにおいて、我々人間を十字架と復活により贖われた支配者と位置づけ、神との協働に招いておられる。そこで大切になるのは、聖書からこの世界と

自分自身を知ること、創世記1～3章の創造と堕落の記事を正しく解釈することである。

ここに紹介するのは、ホイートン大学の旧約学教授ジョン・H・ウォルトン著『創世記1章の失われた世界 ―古代宇宙論と起源に関する議論』（邦訳未刊、2009年）。推薦者の一人はかのフランシス・コリンズで、『福音の再発見』の著者スコット・マクナイトも本書を援用する（194頁）。要約と結論部分から引用しよう。創世記は古代文献であっても現代科学の書物ではない。古代世界の文脈に沿ってテキストを読み、著者が真に伝えなかったこと、当時の聴衆が明瞭に理解したことを知るのが真の字義的解釈であり、それは我々現代人の理解とかけ離れている。創世記1章は宇宙的神殿開闢（かいびゃく）の観点から読むべきで、宇宙は神の神殿としての機能（function）を与えられている。イスラエル人にはこの世界の機能がより重要なのであって、物質の起源や構成にはほとんど関心がない。それゆえ、創世記1章は物質の起源というより機能的起源（特に対人間）の叙述として提示されてきたのだ。「創造する」と訳されるヘブル語バーラーは、機能を割り当てることに関係している。創世記1：2a「地は茫漠として何もなかった」は、物質よりむしろ機能が何もなかったという言葉で始まる。最初の三日間はいのちにかかわる時間、天候、食物の三機能、四日目から六日目はその役割と領域を割り当てる諸機能にかかわっている。反復される「良しとされた」は、人と関連する機能性への言及である。第七日のクライマックスは、神が神殿における活動を休まれる、宇宙的神殿七日目の落成式と言い得る。神殿は人間の益のため諸機能がセットアップされ、神が被造物との関係性の中で住まわれる。無からの創造が創世記1章の主眼でないとするなら、自然科学との軋轢は起こりにくい。

創世記1章の解釈は、福音派にとっては無誤性理解との関係で従来なかなか正面から扱いにくかったテーマだが、こうした旧約学の進歩と相まって、神のかたちとしての人間の意味、原罪の問題などにも新たな光が当てられ、包括的福音や宣教理解の深まりにも寄与すると期待される。誤りなき神のこぼへの理解と信頼性が深まることを願うものである。



災害対応を通して、地の塩、世の光として人々に仕える教会

ホィートン大学人道的災害支援研究所 (HDI) との共同プロジェクト報告

JEA 総主事 品川謙一

JEA 援助協力委員会と長年の協力関係にある国際的支援団体ワールド・リリーフの紹介と資金提供により、2012 年 7 月からスタートした米国ホィートン大学人道的災害支援研究所 (Humanitarian Disaster Institute = HDI) との災害対応共同プロジェクトは、この 7 月で当初設定されたプロジェクト期間二年を迎えました。7 月に来日した HDI のディビッド・ボーアン所長と協議し、追加の資金提供はないものの残されている資金を使ってプロジェクト期間を一年延長することで合意しました。

このプロジェクトの目的は、JEA と日本の諸教会の災害対応能力をあげることで、①災害対応のできる人材育成、②災害対応のための教会協力ネットワーク構築、③災害対応に関する研究支援、④ JEA 総務局の災害対応支援、の 4 つが主な協力分野となっています。具体的には、東日本大震災をきっかけに立ち上げられ、主流派、聖霊派、カトリックともネットワークをもつ DRCnet (災害救援キリスト者連絡会) をプラットフォームとして、以下の 3 つのプロジェクトを進めています。

1. 災害対応チャプレン養成プロジェクト

9.11 米国同時多発テロの際、多くのトラウマをかかえた消防士、警察官の心のケアにあたった米国救世軍のケビン・エラズ師が開発した災害対応チャプレントレーニング (国連や航空機乗員の



「危機対応・最初の 48 時間」出版セミナーで阪神淡路大震災時の経験を語る岩上敬人師

訓練としても採用されているもの) の内容に基づき、災害対応ができる人材育成を目指して活動しています。2014 年 5 月には、エラズ師の著作「危機対応・最初の 48 時間～だれもが知っておきたい災害時のケア」(いのちのことば社刊) を翻訳・出版し、この本をテキストにした危機対応セミナーを各地で行っています。2014 年 6 月に聖契神学校、9 月に東海福音フェローシップ (TEF) 地震委員会、10 月に福島県キリスト教連絡会 (FCC) でそれぞれ危機対応セミナーを開催しました。

東日本大震災から学んだ大きな教訓の一つは、災害時に頼りになるのは顔を見知っている人の関係であり、地域における牧師、信徒の教派・教団をこえた交わり・協力関係を災害発生前につ

2. 教会防災ネットワーク推進プロジェクト

くっておくことが、最も有効な災害準備であるということでした。同時に「防災」は地域社会の関心が集まっているトピックであり、「防災」の切り口で自治体や地域社会と関わることで、地域における教会の存在感・信頼感アップにつながることも期待できます。



地域防災マップを見ながら共同作業する NHK 防災ネットワーク参加者たち

現在、首都圏地域では、上野地区、新座・東久留米・清瀬 (NHK) 地区、板橋地区、大久保通り地区、狭山地区などで地域教会の防災ネットワークが立ち上げられています。JEA 援助協力委員会

のセミナーも行ったことがある相模原地域や東海地域でも地域教会ネットワークによる防災の働きが行われていますし、8 月の土砂災害に対応した広島宣教協力ネットワークの事例からも学ぶことが多くあります。全国各地域ごとに教会ネットワークが広がっていくことを願っています。

3. 東日本大震災国際神学シンポジウム

2012 年から、米国フラー神学大学院、DRCnet、聖学院大学、東京基督教大学などの協力で開催されてきた東日本大震災国際神学シンポジウムに、2014 年はホィートン大学も加わり、HDI のディビッド・ボーアン所長が「災害が教会に教えるもの」、神学部のジョージ・カランティス教授が「あなたは誰の足を洗うのかー苦難のただ中でリーダーを起す」をテーマに講演しました。次世代へのビジョン継承を主眼にした次世代集会にはキリスト者学生会 (KGK)、キリスト教友愛会 (SCF) のメンバーなど 120 名が集まり、主流派、福音派双方からの発題を聞き、共に祈る時をもちました。これは日本のキリスト教界の将来に希望を感じさせる集会でした。またこのシンポジウムに関わる各大学の協力が、アカデミックな面での災害対応研究につながっていくことを期待しています。



第 3 回東日本大震災国際神学シンポジウム次世代集会に集まった KGK・SCF の学生たち

DRCnet の枠組みで進められている上記 3 つのプロジェクト以外にも、HDI との協力で様々な働きが行われています。

2014 年 7 月、シオン錦秋湖キャンプ場で開催された 3.11 いわて教会ネットワーク・リトリートに、HDI のボーアン所長らが協力しました。災害時の教会の使命に関して、ハイチやケニアでの事例から災害に教会が関わる意義とリスクを語り、「教会による災害対応は、教会が地の塩、世の光として主イエスの憐れみによって人々に仕えるという中心的使命からなされるべきことで、NGO が行う災害対応とは根本的に異なる性格と意義がある」、



3.11 いわて教会ネットワークリトリート参加者のみなさんと

「災害は地域で誰が弱い立場にあるのかを教えてくれるので、そこに仕えることが教会本来の使命に基づく長期的支援につながる」など、世界各地の災害対応から学んだことを分かち合ってくださいました。岩手の先生方から「3 年半もやもやしていたことが明確になった」という声も聞かれました。

この夏、HDI からのインターンとして高澤敬兄が二ヵ月間奉仕してくださり、JEA 総務局の被災に備えた総会、理事会の資料・議事録のスキャン、教会防災ネットワークの Facebook ページ構築などを手伝ってくれました。今後も HDI との協力関係を通して、日本の諸教会の災害対応能力の向上に少しでも貢献できればと願っています。

この国に遣わされた証し人として

JEA 社会委員 柴田智悦
日本同盟基督教団 横浜上野町教会

1974 年、ローザンヌで開かれた世界伝道会議において告白された「ローザンヌ誓約」は、第5項で「キリスト者の社会的責任」について述べています。まず、「人間社会全体における正義と和解、また、あらゆる種類の抑圧からの人間解放」が主のみ旨であり、私たちはそれに「責任をもって関与すべきである」と語られています。しかし、私たちが「これらの点をなおざりにしたり、時には伝道と社会的責任とを互いに相容れないものとみなしてきたことに対し、ざんげの意を表明」し、「伝道と社会的政治的参与の両方が、ともに私たちキリスト者のつとめであることを確認」しています。さらに、「私たちは、悪と不義の存在するところでは、いずこにおいても、勇断をもってそれらを告発しなければならない」、「この不義の世界の真只中で、ただ単に神の正義の何たるかを鮮やかに示すのみでなく、それを押し広めて行かなければならない。私たちが主張する救いは、私たちの個人的責任と社会的責任の全領域において、私たち自身を変革して行くものである」と、告白し、信仰に伴う行動を宣言しているのです。ところで、私たち日本の福音派は、どれだけこの社会的責任を自覚し、自らが変革されてきたでしょうか。

1868 年の明治維新から始まる日本の近代化は、1945 年の敗戦まで、天皇制・国家神道を中心として進められてきました。特に戦時下、政府は、キリスト教や仏教を弾圧・迫害し、植民地としたアジア諸国をはじめ、国内においても神社参拝を強制し、信教の自由を奪いました。ところが、日本の多くのキリスト教会は、アジア諸国に対する植民地支配や侵略戦争に積極的に協力するどころか、神社参拝を十戒に背く偶像礼拝として拒否せず、かえって国民儀礼として受け入れ、植民地とした国の諸教会に神社参拝を

強要しようとまでしたのです。戦後 50 年が経つころ、多くの教団教派が戦争責任告白をする中で、JEA は 1995 年の第 10 回総会において、「戦後 50 年にあたっての JEA 声明」を出しています。そこには、「戦時下と言われる『昭和 15 年戦争』の間、とりわけ第二次世界大戦中の天皇制・国家神道体制下に諸教団・諸教会を包括する形で発足した『日本基督教団』は、天地の創造者・歴史の支配者である唯一神への信

仰の告白を曖昧にしたことにより、国民儀礼・神社参拝に参与し、戦争の勝利のために祈願し、国家の植民地政策に積極的に協力しました。こうして私たち日本の教会は全体として、偶像崇拜の罪を犯すとともに、周辺諸国、特にアジア諸国への侵略に加担し、教会が世にあって使命を果たす力を著しく失いました。」「私たちは今、この歴史の大きな節目にあたり、日本の教会が置かれたこのような立場を厳粛に受けとめ、偶像崇拜の罪を自ら犯すとともに、近隣のアジア諸国の教会に対してもそれを強要し、また、アジア諸国への侵略に加担した日本の教会の罪を神の御前に悔い改め、近隣のアジア諸国の教会に対して心から謝罪し、赦しを求めます」と告白しています。

日本国憲法も、このような歴史の反省と教訓から、国家と宗教の分離を徹底するために政教分離原則を定めたのです。ところがキリスト教会は戦後も、政治問題を信仰の課題として捉えず、積極的に世にある使命を果たそうとせず、伝道と社会的責任を切り離して政治や国家に対する務めを放棄し、伝道に集中する傾向にありました。しかしながら、そのように政治や国家の問題から遠ざかって伝道に邁進したとしても、日本における福音宣教が進んだとは言えません。『クリスチャン情報ブック』による 2013 年のデータでは、プロテスタント推定信徒数は約 50 万 3 千人で、総人口の 0.4%、内、礼拝出席者数は約 32 万 2 千人で、総人口の 0.25% に過ぎません。ところが、植民地とされた韓国のキリスト教会は、一部とはいえ大日本帝国の国家権力による神社参拝強制を拒否したり、独立運動の中心的役割を果たしたりしました。現在の韓国におけるクリスチャン人口の増大は、教会がそのような社会的責任を果たしたことにも原因があるのではないのでしょうか。

主は預言者エゼキエルに対して次のように語られました。「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くと、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。・・警告しないなら・・わたしは彼の血の責任をあなたに問う。」(エゼキエル 3:17,18)。JEA 社会委員会は、そのような「見張り人」として国家を監視し、預言者として指導者たちの過ちを指摘して正しい道を指し示し、祭司としてこの世を主に執り成して行く働きを担っています。具体的な働きの一つとして、

毎年宗教改革記念日前後に「信教の自由セミナー」を開催し、その講演録をブックレットにして発行しています。今年は 10 月 27 日(月)、美濃ミッション代表の石黒イサク師を講師にお招きして、初めて名古屋で行います。1929 年～33 年にかけて、美濃ミッションの小学生児童が神社参拝を拒否したことによって、美濃ミッション排撃運動が全国に広がりました。日本においては唯一とも言えるクリスチャンの神社参拝拒否は小学生児童によってなされたのですが、他のキリスト教会は世に加担して排撃運動をしたのです。そのような歴史を背景にもつ石黒師の話は真に迫ってきます。東海地区の方々は振るってご参加ください。また、社会委員会といたしましては、次世代を担う世代にもこの国の歴史を共有していただきたいと願っていますので、教会の若者たちにも、ぜひお勧めくださるようよろしくお願いいたします。

※編集注：発行の遅れのため、2014 年度信教の自由セミナー開催後にこのニュースレターが届くことになったことをお詫びいたします。

第26回信教の自由セミナー
この国に遣わされた証し人として、『聖書と主の御心に従って生きるとは。』ヨハネ 17:16,17
講師：石黒イサク師
日時：2014 年 10 月 27 日(月) 18:30～21:00
場所：在日大韓基督教会名古屋教会
《名古屋市中村区名駅 2-39-11》
052-5650480
★無料
主催：日本福音同盟 (JEA) 社会委員会 協賛：キリスト者学生 (JSG)
日本福音社会主義委員会
日本同盟基督教団 信託と国策委員会
日本福音キリスト教会連合社会部委員会
日本キリスト教団福音による和解委員会
日本福音同盟
連絡先：日本福音同盟事務局 03 (3265) 1785

(P.1 より続き)

況は同じです。いつの時代でも変わりません。それぞれの時代の教会は、それぞれの状況の中で信仰のために戦ってきました。

私たちは私たちが、今、置かれている状況の中で正統的な信仰のために「戦う」必要があります。JEAは主にある互いの交わりを楽しむ場ですが、同時に、共に戦うための場であり、そのために互いに励まし合う場です。

正統的なキリスト教会に入り込む異端は（いつの時代でも同じことかもしれませんが、最近の異端は特に）自分たちの主張を前面に出して正統的な教会から自分たちの団体に人を誘い入れることより、各国の諸教会の連合（福音同盟等）の中核に入り込み、主導権を取ろうとしている動きが顕著です。

福音同盟は、日本では小さな存在です。メリットよりは責任を感じて加入する団体が多かったかも知れません。けれども、私たちが考える以上に、入ることにメリットを感じている人たちがいます。福音同盟は、キリスト教国では経済力、社

会的影響力や信頼性、行政機関との関わりも大きいからです。もちろん、キリスト教会内部に占める立場もあります。いつの時代でも、異端はそこに何とかして侵入し、主導権を奪おうとしています。

伝えられてきた「信仰」のために、それをさらに伝える宣教の課題があります。また、それぞれの時代の社会に対して、主イエスこそ「支配者であり主である」と告白する必要があります。そしてキリストを否定する者を見極め、退ける必要もあります。

JEA自体が、異端を判定する機関であるわけではありませんが、諸教派・諸教団が正しい信仰を継承するために必要な協力と助け合いを進めたいものです。先人から受け継いだ正統的な信仰と実践、うそのない誠実な生き方を失わずに、次世代に確実に受け継がせましょう。

変革としての宣教 ～トランスフォームワールド世界宣教会議報告～

インドネシアから始まった世界的宣教運動であるトランスフォームワールド・コネクションのグローバルリーダシップサミット2014が2014年6月9日～14日、スイス国ジュネーブとフランス国マコン市近郊で開催され、世界各地から約250名が参加しました。

この運動の中心的価値観は、その名の通り「変革としての宣教 (Mission as Transformation)」で、世界が直面している具体的な課題に福音によって変革をもたらしていこうというコンセプトの集まりでした。これは、わたしたち日本の教会が東日本大震災の経験から学んでいるホーリスティック (包括的) な福音宣教の方向性とも重なり、学ぶべきことが多くありました。

世界福音同盟 (WEA) やローザンヌ世界宣教会議など他のグローバルな宣教ネットワークと比較して、トランスフォームワールドの特徴は、より絞り込まれた世界共通の問題を力を合わせて解決していこうという具体性です。集まった人々は学者や組織人というよりも現場で働きを進めている実践者で、次回までにこれとこれと一緒にやろうといった風に具体的に実践できる働きの相談をしていたことが印象的でした。

2020年まで取り組むべき世界共通のチャレンジとして、次の7つが上げられています。(1) イスラムのイデオロギー・チャレンジ、(2) ファミリー・チャレンジ、(3) 孤児チャレンジ、(4) 貧困チャレンジ、(5) 正義チャレンジ (信教の自由、人権問題など含む)、(6) キリストの宣教チャレンジ (未伝地開拓など含む)、(7) セレブレーション・チャレンジ (礼拝と祈り)。

これに7つの文化的影響の領域 (sphere: ファミリー、教育、メディア、芸術、政府、教会、ビジネス) と3つの世代 (generation: Gen-X、Gen-Y、4/14の窓)、10の地域という切り口を加えて、多角的・多層的な協力ネットワークをつくっています。6ページで紹介した4/14の窓運動もこのトランスフォームワールド・コネクションの一部で、4/14ムーブメントだけでも国際会議に

千人近く集まるのですから、影響力が大きいことがわかります。もともとアジア発のムーブメントであり、中心的リーダーたちはアジア福音同盟の指導者、ローザンヌ運動の地区リーダーでもあるので、今回のサミットでは、WEA・AEA (各国福音同盟の集まり)、ローザンヌ運動とトランスフォームワールドがそれぞれ特色を活かしながら協力していこうという意



集会は屋外の簡易テントで開催。リラックスした雰囲気の中に、主の御業への期待があふれていた

志表明もありました。

わたしは自分自身が離婚家庭出身なのでファミリー・チャレンジのグループに参加し、世界各地で家族問題を通して福音が浸透し、家族と社会

の変革が起こされていることを聞いて励まされました。

今回、日本からはルイス・ブッシュ師と長年の交流がある奥山実師、拡大宣教学院の永井信義師などペンテコステ系の先生方を中心に10名の参加でした。いわゆる福音派からは塩釜聖書バプテスト教会の大友幸証師とわたしだけでしたが、来年10月、エジプトで開催される次回のグローバルサミットには福音派からももう少し参加があってもよいのではないかと思います。特に、2016年の第6回日本伝道会議 (JCE6) 開催に向けて、会議やグループワークの手法に参考になりそうな部分も多いですし、世界各地で起こされている神様の御業の報告を直接聞き、同じような宣教分野に取り組んでいる友人に出会えることは大きな励ましなのです。日本からより多くの方が参加することを期待したいと思います。

(JEA 総主事 品川謙一)

総務局から

- ◆新しい理事会のもとで三年間の歩みが始まりました。2016年9月27日～30日、神戸で開催される第6回日本伝道会議 (JCE6) に向けて、JEA 自身も "Re-VISION" (これまでの歩みを振り返り、新たなビジョンによって歩み始める) に取り組もうとしています。この国にまことの福音が満ちる日に向かって主の導きを共に祈り、力を合わせていきましょう。
- ◆2015年度・第30回 JEA 総会は2015年6月1日～3日、静岡県掛川市のヤマハリゾート・つま恋で開催予定です。
- ◆今号の発行が遅れ、いくつかの記事の季節感や集案内容が時期遅れになってしまったことをお詫びいたします。



日本福音同盟

心をつなげて福音の信仰のために力を合わせて戦い (ピリピ 1:27)

JEA ニュース 46号 発行・日本福音同盟 (JEA)
発行者・中台孝雄 編集者・品川謙一
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-10CC#615
TEL: 03-3295-1765 FAX: 03-3295-1933
email: adminoffice@jeanet.org web: http://jeanet.org/